

第61回 北日本 図書館 大会

図書館は“知の拠点”—地域に役立つ図書館をめざして—

第61回北日本図書館大会は、「知の拠点」をテーマに6月24・25日の両日、盛岡市のアイーナを会場に開催されました。当日は北日本各地から180名余りの参加者が集まり、活発な議論が交わされました。本特集では、基調講演、分科会、全体会を中心に当日の様子を報告します。

本大会は、さわやかな初夏の下、北海道及び東北各地から多数の参加者が集まり、開催されました。

最初に北日本図書館連盟功労者表彰が行われ、図書館事業功労者として5団体、永年勤続者として7名の方が受賞されました。



基調講演

その後、「地域を支える図書館—図書館が地域を元気にする方法—」と題して、千葉経済大学短期大学部准教授の齊藤誠一氏に基調講演をしていただきました。



実例を交えながら、非常に分かりやすく、今後の図書館業務の参考となる内容でした。

資料の中から、その内容を一部紹介します。

~~~~~

### ○地域を元気にするために図書館が行うこと

- (1) 地域活性化のための取組みを意識的に  
行うこと。
- (2) 地域のさまざまな機関と連携すること。

- (3) 人的支援を積極的に行うこと。
- (4) 地域情報（公文書からチラシまで）の  
収集・保存と電子化・発信を行うこと。
- (5) 地域の子どもたち（特に中・高学年以  
上）との関わりを強化すること。

### ○図書館員の姿勢を考える

- (1) 今のさまざまな企画は、図書館が生き  
残るためか。  
→市民のニーズの把握が、必然の結果  
を生む。
- (2) 図書館員があきらめていないか。  
・「小さな図書館だからレファレンスなん  
て無い！」  
・「うちではビジネス相談なんてあるわけ  
ない！」  
「高価なレファレンスブックを買っても  
使われないから、宝の持ち腐れ！」  
・「行政の職員は図書館のことを理解して  
くれない！」
- (3) 元気な図書館員が市民を元気にする。  
・コミュニケーション能力・フットワー  
クの重要性  
・初歩的方法の伝授

### ○その他

- (1) 知識、技術、経験、そしてホスピタリ  
ティーと情熱。
- (2) 知識、技術を養うには、多くの経験(実  
践)をつむこと。  
◎ 利用者が図書館員を育てている。
- (3) 図書館は質的に進化する。  
◎ 創造が新たな創造を生み、その創造  
物を後世に伝えていくのが図書館。

## 分科会

第1分科会では、「地域課題解決と図書館サービス」のテーマで、2名の方より事例発表をしていただきました。



### 事例発表①

「地域資料収集の取組みー早池峰神楽ユネスコ無形文化遺産登録を受けてー」  
岩手県花巻市立石鳥谷図書館

主査 吉田 郁子 氏

平成22年3月まで勤務されていた花巻市立大迫図書館での取組みを発表していただきました。その内容は次のとおりです。

早池峰神楽は、「<sup>たけかくら</sup>岳神楽」と「<sup>おおつくないかくら</sup>大償神楽」の総称であり、昭和58年開館時から関係資料の収集を行ってきたこと。

平成21年9月のユネスコ無形文化遺産登録を受けて、全国の神楽団体や自治体に図書資料やAV資料の寄贈を依頼したこと。

資料の残部が少ない中で、寄贈いただいたり、貸していただいたりし、大変感謝していること。

課題として、市町村合併により不明となった多くの資料、民俗芸能の伝承や担い手の高齢化、さまざまな媒体で保存された資料の保存方法が挙げられること。

これからの図書館には、貴重資料のデジタル化、利用者の要望に対応できる専門性やサービス、そして、次世代に貴重な資料を引き

継ぐことへの責任と役割があること。

それぞれの地域における特定の主題に係る資料収集の課題や今後のあり方について、参考になりました。

### 事例発表②

「秋田県立図書館のデジタルライブラリーー地域の活性化をめざしてー」

秋田県立図書館

企画・広報班長 山崎 博樹 氏

平成7年から取り組んでいるデジタル化（電子化）について、発表していただきました。その内容は次のとおりです。

デジタル化の目的として、時間的・空間的利用の拡大、所蔵資料の活用、所蔵資料の保存、他機関や個人の資料の収集と提供があること。

このような中、秋田県立図書館は、普段見せられない貴重資料のデジタル化、言葉だけや冊子化されていない地域資料のデジタル化、アナログ資料等へアクセスするための索引データベースの構築、WEB（リンク）情報の収集に取り組んできたこと。

成果として、民話のデジタル化による地域ボランティアの育成、貴重資料の再評価（職員の研修）、図書館のアピールなどがあったこと。

デジタル化を進めていく上で、多額の費用の問題、システムの標準的な仕様、地域資料のデジタル化、職員研修の充実など課題が多いこと。

近年話題となっている、電子化について、非常に参考になりました。

第2分科会では、「子どもと本を結ぶー図書館と学校・家庭・地域の連携ー」のテーマで、2名の方より事例発表をしていただきました。



### 事例発表①

「子ども司書認定制度と学校との連携による読書推進事業」

福島県矢祭もったいない図書館

館長 金澤 昭 氏

図書館の設立経緯を交えて、発表していただきました。その内容は次のとおりです。

~~~~~

平成19年1月に開館したが、もったいない運動キャンペーンということで、本の寄贈のお願いをしたところ、全国でニュースとなり、40万冊が集まったこと。

そのような中で、子ども読書の街づくりに力を入れ、子ども司書講座を開催し、認定を受けた子どもたちが図書館職員と一緒に読み聞かせなどに協力していること。

また、学校との連携事業として、図書館の本の有効活用により、各学校の読書環境の整備を図り、応援していること。

以上の取組みで矢祭もったいない図書館は、読書で町おこし、子ども読書で街づくりにがんばっていること。

~~~~~

住民を巻き込み、町全体で読書活動に取り組んでいる様子が分かる内容でした。

### 事例発表②

「子供図書室の取組み」

宮城県仙台市泉図書館

主任 菅原 弓子 氏

図書館施設を有効に活用するための取組みについて、発表していただきました。その内容は次のとおりです。

~~~~~

子供図書室は、子供読書活動の一層の推進を図ることを目的に「子供と本の場づくり・関係づくり」という基本コンセプトのもとに設置されたこと。

4つの機能とサービスの方向性があること。

機能1 子供と本を結ぶ機能

読書の喜びや大切さを伝える場の提供

機能2 本を通して子供と大人を結ぶ機能

読書活動にかかわる人のネットワーク形成

機能3 児童書専門図書館としての情報提供機能

図書や読書に関する情報の収集と提供

機能4 子供の本のミュージアム機能

子供の本の世界を見せる(魅せる)場づくり

特にネットワーク形成ということで、学校連携事業を展開し、パッケージ(テーマ)貸し出しやブックトークとしての学校訪問を行っていること。

その他にも様々な事業を行っているが、家庭や学校、地域などと連携を図りながら進めていくよう努力しているとのこと。

~~~~~

限られた図書館スタッフで、様々な事業を展開しており、今後の図書館運営の参考になりました。

## 全 体 会

25日に行われた全体会では、それぞれの分科会の司会者である、盛岡市立図書館館長の後藤伸夫氏と岩手県学校図書館協議会会長の安保位子氏から、概要を報告していただき、各事例発表者からの補足説明後、助言者から助言をいただきました。



### 第1分科会助言者

千葉経済大学短期大学部

准教授 齊藤 誠一 氏

地域資料を残していくためには、市民（住民）と連携のうえ、収集し、整理し、保存し、提供していくことが大変重要である。

デジタル化については、媒体変換がまだまだ不安定であることから、アナログ的な情報で保存していくこともまだ必要とを感じる。

また、費用（維持費）やシステムをどうつくるかといった問題もあることから、一つの館で考えるのではなく、共同でやっていくことも必要と考える。

市民（住民）のニーズは必ずあり、それは図書館に絶対役に立つことから、必要であると思い、さらなる奮起をしていただいて、いいサービスを展開していただくことを期待する。

### 第2分科会助言者

元北上地区子どもの読書活動推進委員会

委員長 佐々木 征子 氏

心豊かにしていないと、いろいろな発想が生まれにくいことを学んだ。

地域全体で読書活動（子育て）するためには、日頃からのコミュニケーションが大事である。

学校連携と言いながら、進まない状態が多いと思うが、連携がうまくいくためには指導体制を整えること、話し合いを持つことが非常に大事である。

さまざまな実践事例があったが、このような実践に学ぶことで、新しいヒントを得、そして活性化につながればと思う。

これからも学校、地域、図書館がうまく連携しながら、いい読書推進活動の形がとれることを期待する。

全体会終了後、社団法人日本図書館協会事務局長の松岡要氏から情勢報告がありました。



最後に次期開催県である、秋田県立図書館館長の石井鈴子氏よりあいさつをいただき、2日間の大会が幕を閉じました。

北日本図書館大会の開催にあたり、ご助言・ご協力をいただいた関係者の皆様に感謝申し上げます、大会の報告とさせていただきます。